枇杷園句集　乾

へ5
1896
1

士朗先生以刀圭餘暇慕蕉
翁之風望千花並馬雅男
出塵事不常遊丘壑其
所居四窗皆名手所栽
樹一枝赤松擬龍以翔西
回枇杷園號而稱之。
余

へ5

彈四絃如珠落盤或
稱琵琶圖美人如綠萼
黄鶴之窓也東向望山峰
猿山新月影升庭樹
先生對之因是垂烟雲
痴也若其賞心殊甚焉

下散芸咏前多書籍須
摩又收窩嶽而澤先生
之静筆之勝桐並美。
此集所收細楷出蓋扇
字洋松見不輯也書其
謂余序之願余之先生

往来寂々是以題其
集曰狀其所以然
文化甲子之秋桂五
書于一句井

枇杷園句集巻之一

春

年内立春

ゆくとしの内に春ハ来にけるも去延

歳旦

何事もなくて春来つあしたかな

元日子白

松のそよまとちつほけなれそ花の春

侘びしくこゝろさち風の十姿

賀

少しはむや年くる年の暮しき

若菜

老が摘む若菜をひとのもらひける
古のゆかりふしける

並べ居八竈の子も七草　梅若菜

蕨

朧月宵の見えぬ杉村少しはなるゝを
ゆくに杉の生垣引ちらず出かけに
このましき庵あるも霞月の西すと
いへるなりしきしこるやまて蕨を折
朱来るも
世の中すゝしに蕨手ならん　月と梅

梅

咲山家月日が出来るむめの花

花さかぬうち梅をかゝる夜目もなかりけり
江の上や二人して立る梅の素肌
白梅の大かしきなる宅中かな
筑州山鹿のさかし秋枝氏
求に應して予か愚吟すかし
いふ章を　一
鶯のはなしも香に匂ひかゝる梅の花
きゝなきり人のかつらうめを食

九岳亭
うめかや藪の中まで掃ちきり
神東にて
貫之の子のまくらそうめの花
梅かやうつしけちなくも香月哉
芭蕉翁肖像開眼
眼も鼻も
ひかりあまへ
うめの素肌

月前

かゝひ出る影や小嵐木のしめの花

暮雨巷法會

おしめハこゝろ墨染の匂ひか那

五十八山の巖六十八山の半復ともの

山路大路よハあれたこゝろく

まゐる渓ゝ迄来させるセ

山よぬるき十ちあるも　梅の下結ひ

鶯

ほうり水し峰　鶯る声し峰の松

鶯るに云との〻る伸よ庵このま

伸のしきゑし只鶯るの声ゝろ外

小の小二庭に鶯るの来り

来りて庭掃のをとこの

告りたれも

鶯を声もしれな　梅ふ垣のしるし

螢耳清水の水しつかれ里
とこてやら螢あきぬ三日月

柳

青柳にしき世の垢ハなかりけり

伊勢にて

青柳のあやめや小家のひとつ白

青柳や暮て啼蹟淀の犬

矢刻にて

青柳の東海道ハ百里一の郡

若草

われは句なし若草こゆる塘ハ

霞

ゆしかのほくゝふてゆくかすみ

古きるのきえんなほりぬ朝かすみ

初瀬

朝螺貝の初瀬にとまる霞かな

春雪

はるの雪るのさかぬ枝もなし

旅人よ雪いふ迄も春の空

去山まて

消のこる雪みもあそふ借ぬ

春面

大佛の雨を見乍ゆく春霞

春風

明日もおん花も神子おん春の風

春風やむかしあてくる擔さ

卯花

卯花を照しくきものしらさりき

みはるや陰かりと嵐しくほす

春月

春の月雛み妻をちる所似きぬ

春の月松をこゑ並んおろくす

糊すれはしるゝちく也雲の月

花

としくや花さや山の影一跡

起くも花見るやまの紫けれ

翁来るを花と見てこそ目はされ

永と似たそそ

あのかしなの庵やさくらまさひかり

虎足菴

咲くはゝ見て花咲る桜かな

芭蕉堂新成矣

肖像安置しまりて

蝶々るもうかやすけちり花の上

贈呉井

よきはしいひくきそのよ花の上

宇陀の山ふミる

よきほとに花のうけある山路かな

ゆかしきも芭蕉人のおもかげかな

芳野行

甲子吟行に曰ひとりよしのゝおくに
たどりけるにまことに山深く白雲
峰に重り烟雨谷を埋んでいと出
色まさるか甚雨にふも降出おほつか
なき岩径を分入るごとくくれ此
清水のとくとく吹出るをもとむ

山をくだるしばらく此辺り菴のさき
清水のやうを見るにとくとくのさま
ふかひろき薮なる花袖に清し
芭蕉翁のおもかげ浮世すゝがばや
そのむかしひかれるを思ひおもふ仰き
まてあふぎけ立ぬされて立ハけから
訪ひ来るも清水をけかすへからと
おそしまてに常住の月澄きらむ

はしきみつりぬ庵し
世を捨よあるらく　山路が
さくらの
嵐山
松さくら一木置ちり　あらし山
花さく白もみもしくはさぬ嵯峨の君
ぬきまらし嵯峨よ仲きて
供しられ花しをふてをおもへ花のかけ
木母寺．

花よ鉦いかなる罪れほろふらん
年らに花の見んやうのかりそり

眉山の花見もせし豊宮崎の文庫
をるところの水に添ふるところ山村のゑきる
うちも神ふかき入る山のやうそまあまや
ときへおもおもれハ
花の木にむすむくれける菴もか

帰路

きれのすいひくもとる山路哉
きらの土ハ路傍の土ちやに
路よろしやをもしろひゆく
古るも母にあゆみ内させ給ふ亭御の
神宮ヲ詣つ
燒塩の亭御のさくら
ちりかゝるを

玉篭行

玉篭のやをみるに志つかれるを師と
しこるの林しきさを用とす 多る農
樵は帰宅小の山居にむせふるにつれる
林しうのきらんさ小児を師ハ一ふして
用ハ百千にわたる百千にあてふ人数
多のしとせす 況や一にあてふ人をや
世のうきをまなんと住まるもののし住る人

すやあんちいさ松の菴に文机の外
見ゆるものなくかくいふに同しさまし
出せる僧のありけるか茶を煮るいと
まる人ゟて床ならせなるを向へとてち
見出せるのことなるものもいとすゝら
や出しき標ゟそこの居に寄りけて
花の色しるきり宋ちかきさるや
いてはしおりふんゝるとかく中に侍りぬる

いへいはおかしきなしとてこのことはかに
留けるる僧の戸をさしこめさるまて
いとしまるるを床しけれ日を要した
かられたるを見るものゝなく鐙くしく
小倉の山路をそるき木の間
まてまりけるる
鐙庭やおほつかなく鐙としてなれ
とて口さてさみけれはこの僧のおかりける

茶のよく煮てゐる侍るとあはしして
まへられ申るにもかしくゐる毎ち
にて候

涅槃會

おれおもに見るすふ哉ハ佛ぞ
道人の申して申さぬ涅槃像
薪買に伸くひとさへも祝なん哉
茶苑

茶の花ハ大名ゐる林藤の事
桂五亭
茶の花にこゝめよすゝめの柿衣
かくれひかれとも覗すゝめそ
きせるそしきも見えて子雀ハ
なんたふねゐる
茶の花に口たしこゝめるの雀
梅ハ肥えて茶の花咲のむ事もなし

藪入
藪入や小さき笑をうち帰る
帰雁
三夜二夜雲も絶ずも雁かな
西湖
山ま一度雲田よ落よの鳥る雁
熊谷にて
入るとしよ入る熊谷堤唐この寺

蝶
浜まろとすれは蝶ゆき蝶とまる
堂
あみ見つるけし人形をこはれ寄
几巾
風ゆらゆらき引しき花の様式
蛙
濱し佐せ夜のみしきを帰蛙

人も見えのいつも見へさる山さくら

燕

ひる農標にもあらぬ小白かな

塗木にむ中を燕の往来かな

雛

かへり来こる啼しか焼の雛の声

ほろくとは花に雛なく柏子哉

寄つましてはみなるくきに哉

幻住菴にて

松むしの雛啼入るを菴の春

雛

ひなのかる花のかけまてこしてきぬ

すゞめ子もまゐるや雛の膳まつり

桃

伏見ふるを日くれて来るかもの花

以下　久能山の叢ニて

以千ぞ毛志らずとゆくはなし

藤

藤のなれもくも那としるなし

寛半日此寐を約るハあるし半日の
寐を失ふされば寐ハ始るさきものく
小原の露よりもちひる世の中に

有しなりし後世菩提の修行者
寐をぬるに骨起ぬれハ快楽をなす
菴のうちに松の枝折なるなふ半日
の楽ハ主人もゆるしなふ屋し迷
篁に琴を弾て月をのみ友とすと
いふなるのかたおろかなへし
山藤の梢なしみけし住居なり

題しらす

ぬるはりかと隣るは未みかり苔の床
父母のおもかけを外になくすゝめ
美しき砂に小松のみとも代
月花を持るは見なれた松の風
花よりやさらふても折をみそろえ

善光寺に西向こもまゐる人の

念仏の声八十八何風月多くひとつのおひ
出くし長明寺に見れは光さる
ひと半にるとさるともまてゝに佛の手をとらせ
まゐなりてさそと見申指をさゝれまゐる
衣の袖からちをらふあしさもなくよろ
こひおたるす群集しけるそかなしけ
なき

朝風く風掃おそれ雀かな

暮春

あさくハこそしまゆく藤の門

ゆく春をあはれむ竹の日影哉

椿堂輯

枇杷園句集巻之二

夏

更衣

なふこそハ父のまゝ着ん更衣

老慵

更衣人のあしきにおとろへぬ

卯の花

卯の花もしらで垣ゆふ男かな

時鳥

美しき声やいるゝのほとゝきす
ほとゝきす思ひ捨ても月夜の声
むら雨はむら降もするを時鳥
住よしの橋ふみとめほとゝきす
みたやまよ所ハ三日もあれ時鳥

菩提山當堂にて

念佛を米かむやうにほとゝきす

まち思ひよせハ一声のほとゝきすを丈
大草は海の風興事をこよひ集
月影まゐるに浮みまつほとゝきすの
来居きまちしきさなりとて二三子ハ
例の瓢携来て松下の陰に盤の足
をりちらしぬ

迯よハ誰をとやらう捨ほとゝきす

若菜

釜さらやいつまでときらぬ若菜

水盛殿より

水盛前をつくる榊のけふ若菜哉

茂

ざくくと水の蔵こむ茂り哉

清佛

尾芭が峰をゆきさるにも

かさはしに梅ゆくひとの孤鶴ふ

とてましたらの上に水盛しより

芭蕉堂を清きすへり

ばせをの佛もしぼまぬ色

竹子

蝸牛

すみの子や子供あてこむ寺の門

眠さきに竹の子あまりふかみより

伊勢が家はきのふより猫さり

蝸牛

牡丹

とやくらし牡丹つりこむ堀の内

当菜

み六代当菜流くる山あらな

茄子

白寿しに窮屈もなき小あかな

あらしさろのみ咲もろもろの花

苔花

苔生ゑをや苞咲ぬ露もちぬ

諫鼓鳥

宋はなきも家ましてある葉あり

蚊帳

連日のあめ雨

日出くるまゝの

簾をこしらへ

餅ひろふやすゝめのあつもく蚊屋のか

蛍

雲の峯や大佛原をゆく野てる

粽

此殿やむかしながらのさし粽

うれしきにいくらも取とくちまき哉

五月雨

五月雨のいゝ七ふ隣なき夕かな

萱津の里

さみだれやあやめ葺屋を掃る庵哉

栗手の杏

ひとつゝつ鷺の白さを五月雨

竹酔日

出け植る日もひとの手本か挿木色

竹ゝ承る其まゝ植よ竹の風

竹なき庭を人の住居もさらぬ　俗

ありしはむかしにし人のてこの条をを
ミて覚えて俄に小さき花を植られはこころ
におもしろき人とはかり来る陰かなし之
出けり思ふに来て白い霧帰るを恋しく
春嵐
むしろなかさてはおゆく春風
春田
見ておる山田を麻のかれる

いせ吉兵衛か茶店にあそふ
田を植るひとものへ早苗はさらは
松さかふる
雨をの垣ほ晃ゆけは春田かな
小雛
さかよへはんなか帰しかるはつ子の門
古井のさと雨と風と亭まて
ゆくゆくせしは小雛の小田はむかふ宿よ

紫陽花

紫陽花やてゝこをとるの木間まで

夕かほ

夕かほやわらひうけ見る老の杖

鵜川

待かねもなくさむる也ゆく鵜舟

余所花山の麓に立て

鵜のかゝり消えて長良の灯の下

短夜

みしか夜や一寐屋におる笠の露

夏月

太秦のまつ休むなり夏の月

夏の月ぬきくしくもこゆる水

団扇

光琳かちらし嘯しかり　古園

清水

掬る也笹ハ葉を落す清水哉

蟬

蜓の口探し蟬鳴く木かけ哉

蓮

立詠ふる池のいるさよ蓮の花

暑

あつき日や小庭の中に逃かへり

大蟻のたくミをあつもくあつさ哉

雲ノ峰

雨きこえ梯子さきぬ雲の峰

蚊さち

蚊さちや紙ミす火を螢霧の中

納涼

あゐし也ぞみりすむも栗と穂

みこのれくるすゝき月のむし哉

檀溪
すゝしさに人の来ぬるす菴かな
丙午此年六月木曽にゆかぬ谷の
ひまく雪を花と詠原のおく花を
舞しるす四時のけしきひとつにして
のこるものなし何そ別に仙境を
尋ねむ

ゆふしほの多さよ木曽の奈美
此跋
清筱しるのきや花いろ此往來

宇洋輯

に五七三 巽角全
中とい とす